

Vol. 2 コラム

ESD プラットフォーム WILL は神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマンコミュニティ創成研究センター（H C センター）を事務局として、2019 年より発足しました。その背景には 2006 年から続く ESD の実践があります。「ESD ボランティア ばらばん」をはじめ、「大船渡 ESD プロジェクト」「ESD 学び隊」など、多様なプロジェクトが積み重ねられてきました。これらを牽引してきたふりーズ（松岡広路）に ESD と WILL についての思いをご寄稿いただきました。

元は「鳥の巣」を指す言葉だったらしい。「ねぐら」とは、あらゆる動き回る生き物が「もちろん人間もそこ」に含まれるのだが—安心して休む」とのできる場の」とをいう。漢字が「土へん」に「時」の合わせ文字であるところが絶妙だ。空間と時間、すなわち安心して休む」とのできる「時空間」ということである。「寝座」とも書くようだ。文字通り、寝る場（座）、あるいは寝る「とも座る」とも自由な場、という「とあるうか。

自分のねぐらは「と振り返つてみる。1960 年生まれの私の最初のねぐらは、広島県の片田舎にある小さな「二戸一（にこいち）」の市営住宅であった。緑と土に囲まれた、縁側と四畳半の二間、それに狭苦しい便所と台所のついた小さな木造の住まいだったと記憶している。隣近所の付き合いは密だったのだろう。そこに居たのは 5 歳くらいの保育所時代までだったが、当時の隣人の顔も名前も、さらには具体的な情景まで鮮明に覚えている。近くのお兄ちゃんやお姉ちゃんの後に続いて田んぼで遊んだ」と。少し裕福で自宅に電話がある家へ借りに行き、かけ方を教わったこと。なぜか保育所に行きたくなくて駄々をこねていた時、2 歳上の近所のお姉さんが優しく手を引いて連れていくてくれたこと。今から 60 年ほど前情景が、ふと懐かしく蘇つてくる。

ESD プラットフォーム WILL は神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマンコミュニティ創成研究センター（H C センター）を事務局として、2019

ねぐら（場）を

探し移ろい



らの面白さが、鮮烈な印象として残っていた。

その後も私のねぐらは親から提供され続けたが、高校を卒業すると、自らねぐらを選ぶ経験をすることになる。ねぐら選びは当然、収入に左右されるが、私の基準は中学生時代に読んだ武者小路実篤の小説『真理先生』に登場する「先生」の住まいであった。舞台は太平洋戦争直後。「真理先生」と呼ばれる世捨て人の居宅には多種多様な人たちが訪れ、それぞれ身勝手に喋り、思惑を吐露しあう。そのうちの一人、好奇心旺盛な学生が本書の主人公だ。彼の語りを通して、先生のねぐらで繰り広げられる人間模様が描かれる。主な訪問者は、才能を認められつづれる兄と、石ばかりを頑なに描き続け「馬鹿」と呼ばれる弟の画家兄弟、その弟が心を寄せるも振られる美貌の娘、そして先生の弟子を自認する人々。どうやらこの小説は、後半で先生が真理を説くくだりに重きがあるようなのだが、私は、多様な人間模様の舞台となつた「先生のねぐら」の面白さが、鮮烈な印象として残つていた。

その後も私のねぐらは親から提供され続けたが、高校を卒業すると、自らねぐらを選ぶ経験をすることになる。ねぐら選びは当然、収入に左右されるが、私の基準は中学生時代に読んだ武者小路実篤の小説『真理先生』に登場する「先生」の住まいであった。舞台は太平洋戦争直後。「真理先生」と呼ばれる世捨て人の居宅には多種多様な人たちが訪れ、それぞれ身勝手に喋り、思惑を吐露しあう。そのうちの一人、好奇心旺盛な学生が本書の主人公だ。彼の語りを通して、先生のねぐらで繰り広げられる人間模様が描かれる。主な訪問者は、才能を認められつづれる兄と、石ばかりを頑なに描き続け「馬鹿」と呼ばれる弟の画家兄弟、その弟が心を寄せるも振られる美貌の娘、そして先生の弟子を自認する人々。どうやらこの小説は、後半で先生が真理を説くくだりに重きがあるようなのだが、私は、多様な人間模様の舞台となつた「先生のねぐら」の面白さが、鮮烈な印象として残つていた。

それでも、今にして思えば、丘の側面に造成されたその新興住宅地は、地域からは浮いた空間だつたに違いない。「地（じ）の子」たちからは「市當住宅の子」と呼ばれ、時折取つ組み合いの喧嘩が、がらも、帰れば羽を休められるねぐらを、幸運にも私は持つていた。



そのせいか、私が最初に選んだのは、東京都文京区にある戦前からの古いお屋敷の一角を貸し間とした下宿だった。明治・大正期の文豪が住んでいたのではないかと思わせる、気品ある木造建築が立ち並ぶ街区。その一角に、その宿坊はあった。土壇に囲まれ、小ぶりながら瓦屋根の門もある。「書生」という響きにぴつたりのねぐらだった。……と言えば、聞こえはいいが、実はボロボロの壊れかけた住宅で、のちに近所の人から「幽霊屋敷」と呼ばれていることが判明した。1980 年代初頭とはいっても、トイレは水洗ではなく「ぼとん便所」。歩けば足が抜けそうな板張りの廊下。部屋は 3 つほどあったが、私以外の住人はいない。一度だけ韓国からの留学生が入居したが、「こんなところに人が住めるか!」と年老いた大家さんに悪態をついて出でていってしまった。家賃は 3 万円弱だったろうか。立地の良さゆえ安くはなかつたが、収支バランスよりも、そこが私のイメージする「真理先生の家」に重なつた」と、2 年ほどそこをねぐらとした。

当時は自己探求的な時空間を求めていたのだろうか。現実の私の志向、つまり「多様な人との出会い」をアクティブに求める傾向にはそぐわない場であつたが、今思えば、稻原美苗先生の奨める「哲学カフェ」のような時空間をねぐらに求めたのかもしれない。人が集いつも、心静かに哲学をする空間。当時は感覚的に選んでいただけだが、矛盾しつつも調和する可能性を秘めた、素敵な時空間であつたと思う。

その後、求めるねぐらの質を見極められないまま、私はねぐらを移り続けていた。詳細は省くが、いまだ「納得するねぐら」には行き着いていない。ただ、徐々に「脱個人化」してきた自覚はある。ねぐらが大学の自治会室であった時も、友人宅や大学院の院生室であった時もある。バンガラデシュ人の在日労働支援をしていた時は、彼らの隠れ家をねぐらにした。同居人が複数あるのは流動的であることは、私のねぐら変遷の特徴だ。私にとってねぐらとは、羽を休める場であると同時に、ある時は親しい人と語らい、ある時は仲間と共に動く準備をする「拠点」でもあった。それゆえ最近は「う思う。ねぐらは自分一人では選べないのかもしれない。居場所や出会いの質は移ろうものであり、どんなねぐらが最適かを悩んでいる時こそが、実は幸せなのかもしれない」と。ねぐら探しは、いまだ迷走中といったところである。

しかし、日を転じてボランティアプログラムやESDの推進体制の在り方を見つめると、「この「ねぐら探し」は裏に大切な」とのように思える。



現在、WILLの「ねぐら」となっているABE（神戸大学A棟1階）は、神戸大学ESDベースが始まり2006年に開設された。Act-on Base for Empowerment and Educationの頭文字をとったもので、「H」パワーメントと教育のための活動拠点が正式名称である。しかし、開設当初に冗談めかしてささやかれていたのは、「AB（アブノーマル）」や「（ええやん）ESD」であった。ESDを面白おかしいものに変える場、それがABEといつてある。

ねぐらをテーマに据えたのは、ESDを進める上で重視される「居場所」や「プラットフォーム」という理念が、「か泥臭さに欠け、よそよそしく、人の心の奥に届かないもののように感じるからだ。生きる過程で、人は多くのねぐらを見つける。ある時は独りねぐらに潜り込み、ある時は人を招いて親しさや優しさに興じる。そしてまたある時は、愛を紡ぐ準備をする。泥臭い自分ながらではのねぐらを探しながら、多様な当事者性を交差させるチャンスを窺う。こうした「ねぐら」こそが、ESD推進の前提条件ではないだろうか。WILLは、これからどんな人のねぐらになしていくのだろう。

ねぐら（場）を探し移ろうべし。その「移ろひ」を現実のものとし得る社会には、何が必要か。こうした問いの立て方もありそうだ。